

# Glocal Tenri



12

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.16 No.12 December 2015

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
ラグビー W 杯  
／深谷忠一 ..... 1
- ・ 天理教教理史断章 (99)  
北野文書①  
／安井幹夫 ..... 2
- ・ 『教祖伝』探究 (18)  
かぐら面お迎え  
／深谷忠一 ..... 3
- ・ 「おふでさき」天理言語教学試論～「こと」  
的世界観への未来像～ (20)  
第3章 和辻哲郎—日本語と哲学の問題①  
／井上昭夫 ..... 4
- ・ 「おふでさき」の標石的用法 (4)  
反復表現と句切れ  
／深谷耕治 ..... 5
- ・ 「おさしづ」語句の探求 (11)  
第1巻において「道」が用いられる場面②  
／澤井治郎 ..... 6
- ・ 天理参考館から (4)  
展示のミカタ  
／幡鎌真理 ..... 7
- ・ 新宗教のブラジル伝道 (32)  
救済の多様性 天理教②  
／山田政信 ..... 8
- ・ 地域福祉を拓く —新たな寄付文化の創造— (12)  
「天理び〜すべ〜すプロジェクト」の取り組み⑤  
／渡辺一城 ..... 9
- ・ 遺跡からのメッセージ (6)  
イギリス滞在記② 中世の町並みが残る  
イングランドの都市ノリッチ  
／桑原久男 ..... 10
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ  
関係試論 (5)  
コンゴ王国のキリスト教化②  
／森 洋明 ..... 11
- ・ ヴァチカン便り (17)  
シノド会議の総括  
／山口英雄 ..... 12
- ・ 2015 年度公開教学講座要旨 (2)  
天理教と現代社会の生死観：子供  
／金子 昭 ..... 13
- ・ English Summary ..... 14
- ・ おやさと研究所ニュース ..... 15  
第 286 回研究報告会 (堀内みどり) /  
教団付置研究所懇話会・第 14 回年次大会 (深谷忠一) / アフリカ特別講演会開催 (森洋明) / 『グローカル天理』合本のご案内 / 平成 27 年度公開教学講座のご案内

## 巻頭言

### ラグビー W 杯

おやさと研究所長 深谷忠一 *Chuichi Fukaya*

後世に歴史的なできごととして語り継がれるであろう今年のラグビーワールドカップでの日本の活躍は、従来の日本代表とは異なるチーム作りの成果でありました。

ヘッドコーチに就任したエディ・ジョーンズ氏は、日系豪州人で奥さんが日本人。「私は、豪州でも日本でも異質な立場。コーチとして認められるには特性が必要だった。異なる方法を模索して勝つ事を、人生の中で培った」と言う彼は、世界の弱小に甘んじていた日本のラグビー界の意識革命をするためには最適な人物でした。

彼は、「就任当初は、選手や指導者に、試合の前から『日本は体格もパワーも劣る。格の違う相手に勝てるわけがない』という意識が支配的だった。そこで、私は、日本は速さ、体力、技術、チームとしての動き、激しい練習に耐える気質など、よい特性を磨くことで勝てると、繰り返し違う方法で選手に伝えた。最初は選手に恨まれた特訓も、成果が出るにつれて理解が深まり、意識そのものが大きく変わった」と、チーム作りを進めた方策を語っています。

しかるに、それよりも印象的なことは、彼が日本人の心的特性を的確にとらえて、選手を鼓舞し導いていったこと。「武士の生き様で最も大切にされたのは名誉で、そのためには死も厭わない部分がある。日本人は、何かの大義を心から信じた時に、最大の力を発揮できる国民なのだと感じた。人生で、誰もが望む大義とは、歴史を変える特別な機会の一部となることだ。私は選手に、日本のラグビー史に残る最高のチームの一員になると、こんな特別な機会の一員になれる

のは、とても幸運なことなのだと伝えた」という彼の言葉は、昨今の日本人の口からはなかなか出てこない類のもの。日系人という立ち位置のよさが現れたものだと思えます。

さらに申せば、今回の日本代表 31 人には、外国出身者が 10 人 (うち 5 人は日本国籍を取得) 入っています。国籍主義の他の競技と違い、ラグビーでは「3 年以上継続して居住し、他国の代表経験がない」との条件を満たせば、誰でもその国の代表になれるのですが、最初は、誰もがこのチーム構成に、多少の違和感を持ったと思います。しかし、ここでも「日系の外国人」という絶妙な立場のヘッドコーチの存在が、この (元) 外国人と日本人の混成チームが、日本代表チームとして皆に受け入れられる大きな力になったと思うのです。

森田浩之というジャーナリストが、「ラグビーとノーベル賞の栄誉の間には、狭い意味での日本人が現在持つ力で勝ち得たわけではないという共通項がある。ラグビーでは選手の国籍を問わないルールの下、日本という場に集まった多様なあふれる集団が大健闘を見せた。ノーベル賞も歴代の日本人受賞者には外国で博士号を取ったり、外国の研究機関にいた人が多い。彼らを育てたのは日本の環境だけではない」(『ニューズウィーク』2015/11/03) と言っています。しかし、筆者は、これからはむしろ、狭い意味での日本 (人) の力・環境に拘泥するのではなく、広い意味での日本 (人) の力・環境を大いに活用して、日本人が持つ潜在力を十分に引き出すことが、日本 (人) が世界で活躍するためには重要なことだと思っております。